

R D U F 小委員会テーマ提案書

1. 運営区分	3. ステークホルダーを集めて、課題解決に向けて対策等を話し合う。
2. テーマ	リサーチデータサイテーション (RDC) 小委員会
3. 目的	<ul style="list-style-type: none"> ・研究データの利活用の推進においては、データ公開者のインセンティブの確保が重要である。 ・そのためには、論文に研究データの引用を相互運用性がある形で記載し、引用・被引用関係を把握可能にすることが重要。 ・しかしながら、研究分野にも依存するが、研究データの引用は進んでいないのが現実である。 ・そこで、各ジャーナルにおけるデータ取り扱い（投稿規定等）の現状調査など、データ引用を取り巻く状況を把握する。 ・内外における研究データの利活用に向けた取り組み事例を調査し、データ引用の一般化に向けた課題の解決に向けた参考とする。 ・更に研究者、出版社、学会、図書館、情報流通業者等、職種の壁を越えて研究データ引用に関わるメンバーに参加して頂き、我が国における研究データ引用の実現に向けての人的ネットワークを作り、研究データ引用の付与に向けて立場を越えて議論可能な場の創設も目的とする。
4. 成果物	<p>我が国における研究データ引用の普及に役立つ基礎的調査資料 以下は、例であり参加した委員の関心や専門知識などにより決定したい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各ジャーナルにおける研究データ引用方針の調査報告 ・実際のデータサイテーションのベストプラクティス事例の調査・紹介等
5. 成果のインパクト	<ul style="list-style-type: none"> ・データ引用・被引用を把握する仕組みを構築し、研究者に対しデータの引用時の記載を普及させることは、データ公開のインセンティブになり、オープンサイエンスの推進にとって必要不可欠な行為である。 <p><プロセス></p> <ul style="list-style-type: none"> ・今回の小委員会の活動を通じ、研究データの研究データの引用・被引用情報の記載・流通・利用等の各プロセスに関係する委員が集まり、研究データ引用の実現・普及に向けて課題解決を議論し合う場を設ける意義は非常に高い。 <p><成果></p> <ul style="list-style-type: none"> ・国内外における研究データ引用に関する動向をキャッチアップし、日本での現状を調査して比較することは、各システムにおける相互運用性を向上させ、日本で研究データ引用を普及させるために必要。
6. 小委員会の活動計画	<ul style="list-style-type: none"> ・2ヶ月に1回程度の会合（Web参加も可能）と、クラウド上の作業等で進める。 ・調査対象については、参加した委員にとって関心の高いトピックを選んで実施する予定である。（例は4. 成果物に記載） ・活動計画も第1回目の会合で決定する。以下は現在の案である。 2018年12月 委員募集開始 2019年1月（予定） 第1回小委員会

	<p>活動内容説明、委員長選出、年間活動計画（進め方）を決定</p> <p>2/18 公開シンポジウムにて委員募集</p> <p>小委員会開催（1～2回） 調査、情報共有、情報整理、等</p> <p>5/27-28 JOSS2019 にて、中間発表</p> <p>小委員会開催（3～4回） 調査、情報共有、情報整理、分析、</p> <p>12月 とりまとめ</p> <p>2020年1月頃 RDUF 公開シンポジウムにて成果報告</p> <p>その後、可能であれば論文等にまとめる。</p>
7. 初期委員 (所属) (順不同)	<p>○能勢 正仁（名古屋大学宇宙地球環境研究所 電磁気圏研究部）</p> <p>○林 和弘（文部科学省 科学技術・学術政策研究所 科学技術予測センター）</p> <p>○高橋 菜奈子（千葉大学附属図書館/アカデミック・リンク・センター）</p> <p>○大向 一輝（大学共同利用機関法人情報・システム研究機構国立情報学研究所 コンテンツ科学研究系）</p> <p>○住本 研一（国立研究開発法人科学技術振興機構 知識基盤情報部）</p>
8. その他	<p>幅広いトピックですので、データ引用に関わっているあるいは関心のある多くの方の参加をお待ちしています。</p>